

第8回講義 (20120622)

§ 4 同一性言明の意味について (続き)

§ § 3 クリプキの議論の検討

4、同一性言明の分類への適用 (再説)

前回の検討を踏まえて、次のように分類し直したい。

(1)二つの単称確定記述句の同一性:

(1-1)アポステリオリで偶然的

「二重焦点眼鏡を発明した男がアメリカの初代郵政長官であった」(116)

(1-2)アプリアオリで必然的

「 $2+2=6-2$ 」

(1-3)アプリアオリで必然的(同義語を与える定義)

「円周率=円周の直径に対する比」

(2)固有名と単称確定記述句の同一性:

(2-1)アポステリオリで偶然的(固有名の指示を固定する定義がすでに別の言明で与えられている時)

「オバマ=2012年のアメリカ大統領」

(2-2)アプリアオリで偶然的(指示を固定する定義の場合)

「オバマ=2012年のアメリカ大統領」

「1メートル=条件Cにおける棒Sの長さ」

(2-2)アプリアオリで必然的(分析的)

単称確定記述句が固定指示子であるので、ここでは両辺とも固定指示子である。

「 $4=2+2$ 」

「 π = 円周の直径に対する比」*

(3)二つの固有名の同一性:

二つの固定指示子の同一性は、必然的

(3-1)アポステリオリで必然的

(二つの固有名の指示を固定する定義がそれぞれ、すでに別の言明で与えられている時)

「Phosphorus=Hesperus」

「タリーはキケロである」

(3-2)アプリアオリで必然的(分析的)

(同義語を与える定義の場合)

「タリー」という固有名の指示対象を、「キケロ」という固有名を用いて指示する定義の場合

「タリーはキケロである」

5 残る問題

問1:(1-2)と(1-3)はともに必然的であるが、「必然的」の意味はかなり異なるのではないか?

問2:(2-2)と(2-3)はともにアプリアオリであるが、「アプリアオリ」の意味はかなり異なるのではないか?

問3:(3-1)と(3-2)はともに必然的であるが、「必然的」の意味はかなり異なるのではないか?

問4:単称確定記述句が固定指示の場合と非固定指示の場合の区別の基準は何か?

問4に関連して、

問5:①「 π = 円周の直径に対する比」は、指示を固定する定義なのか、同義語を与える定義なのか。

*クリプキは、①について、次のようにいう。①は「 π 」の同義語を与える定義ではない。「 π 」は固定指示であり、ある実数の名前として使われているという。「 π は無理数である」と定義するとしてもそれだけでは指示の固定には不十分である。「円周の直径に対する比」、あるいはそれに類する表現を用いずに、 π の指示を固定する方法があるだろうか。私には、ありそうにないように思われる。

*①は、指示を固定する定義だと考えてみよう。

さらに、「円周の直径に対する比」は単称確定記述句で非固定的だと考えてみよう。

このとき、「1メートルは、棒Sの長さである」と同様の定義であることになる。そうすると、この定義①はアプリアリで偶然的事実であることになる。しかし、数学的な真理が、必然的であるとすると、これは必然的でなければならない。ゆえに矛盾する。

*①は、指示を固定する定義だと考えてみよう。

さらに、「円周の直径に対する比」は単称確定記述句で、固定指示であると考えてみよう。

「1メートルは、棒Sの長さである」の場合には、「棒Sの長さ」という非固定指示で指示を固定したために、偶然的事実になったが、ここでは固定指示で指示を固定するので、必然的事実になる。(この理解でよさそうだ。)

*①は、同義語を与える定義だと考えてみよう。

同義語を与える定義として考えられるのは、つぎのように略号を定義するものである。

「円周率＝円周の直径に対する比」

「Au＝金」

①をこのような定義として考えても問題はないように思われる。

6 固定指示子としての自然種名を導入したら、分類はどうなるか？

(1) 自然種名は固定指示子であるか？

クリプキは、「金」について次のように語る。

「現在の科学理論では、原子番号79の元素であることは、われわれが理解する限りで金の本性の一部なのである。それゆえ金が原子番号79の元素であることは、必然的であって偶然的ではないということになる。 (とすれば、われわれは同様に、金という物質について発見した事柄から、色や金属的性質がいかんにかして帰結するかをさらに探求することもできる。そのような性質は、たとえ「金」の意味の一部ではなく、またアプリアリな確実さで知れなかったことは疑いないとしても、金の原子構造から帰結するものである限り、それらは金の必然的性質なのである」 (p.148)

「原子番号79であること」は、「金の必然的性質」の一部なのである。これは次のように言えるだろう。「**金＝原子番号79の元素**」が必然的に真である。これは「金」と「原子番号79の元素」の対象がすべての可能世界で一致することである。これは「金」と「原子番号79の元素」が固定指示であるということである。

■「金」について。

「金」は、これまで固定指示子として考察してきた固有名とは異なり、物質名詞(material noun, mass term)である。「金」という語は、この世界で「金」と呼ばれている物質を、あらゆる可能世界において(もしそれが存在するなら)指示することになる。このような語を「自然種名」とよぶ。これは物質名詞に限らない。「猫」「牛」のような一般名についても同様だ(後述)。

金の指示を固定する定義は、つぎのような仕方と与えられる。

「金とは、あそこにあるある品々、または、ともかくそれらのほとんどすべてによって例示される物質である」 (p.159)

■「原子番号79の元素」について

「原子番号79の元素」は、(単称ではないが)確定記述句である。確定記述句の場合、通常は世界が異なると別の対象を指示する可能性がある。しかし、これが非固定指示だとすると、「一メートルは、棒Sの長さである」と同じく、アプリアリで偶然的な真理であることになる。これは、Kripkeの考えていることではない。

もし「金＝原子番号79の元素」が必然的に真であるとする、科学理論による確定記述句は、固定的に同一のあるいは同種の対象を指示することになる。別の自然法則に支配されている可能世界において「原子番号79の元素」が別の物質を指示する可能性がないとすると、それはどういうことだろうか。

クリプキは「熱」について次のように言う。

「熱は分子運動である」「このことを発見した時、われわれはこの現象の本質的性質を与えるような同一性を発見したのである。われわれはすべての可能世界で分子運動であるような現象を発見した。」

それでは、Kripkeは、可能世界として、<この現実世界と、論理的な真理や数学的真理を共有しているだけでなく、物理的な法則も共有している世界>を考えているのだろうか。おそらくそうではないだろう。もしある可能世界で熱が存在するのなら、それは必然的に分子運動であるということである。別のものが熱さの感覚を生じさせるような世界があるとしても、それは熱とは別のものであるとみなすことができる。

■一般名について

クリプキは、「猫」も「哺乳類」も固定指示であると考え。したがって、「猫は動物である」は、必然的であるという。動物であることは猫の本質的性質であり、しかも「猫」の指示を固定する定義をあたえるときに、「猫は、・・・のような動物である」という定義がもちいられたとすると、「猫は動物である」はアプリアリであることになる。つまり、これは分析的(アプリアリで必然的)真理である。